

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24611012

研究課題名(和文)市民参加型シティプロモーションとしての建築公開行事「オープンハウス」に関する研究

研究課題名(英文)Study on "Open House Programme," where multiple buildings are open to the public

研究代表者

岡村 祐 (OKAMURA, YU)

首都大学東京・都市環境科学研究科・助教

研究者番号：60535433

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,200,000円

研究成果の概要(和文)：建築物一斉公開プログラム「オープンハウス」に着目した本研究では、第一に、海外における2大スキーム「オープンハウスワールドワイド」及び「欧州遺産の日」の比較を行い、特定の週末に無料(割引)で一般公開している点や建築教育を重視している点に共通点を見出した。第二に、約800棟の建築物が公開される世界最大級「オープンハウス・ロンドン」に関して、その実施体制を解明し、6000人超の市民ボランティアの存在や住宅公開では建築家の存在が重要であることを示唆した。第三に、萌芽期にある我が国では、主催者の建築物を対象とした地域資源マネジメントに関する多角的な活動の一環として実施されていることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study focused on an "Open House Programme", where multiple buildings are open to the public simultaneously. First, comparing two major schemes across the world, namely "Open House World Wide" and "European Heritage Days," it revealed the common ground that buildings are open to the general during a specific weekend free of charge or at a discount and they emphasize education with regard to architecture. Second, it indicated that Open House London, which has approximately 800 open buildings, has been supported by participation of as many as 6000 volunteers and also involvement of architects in opening a private house after the making implementation structure clear. Third, "Open House Programmes" in Japan still in an early stage have been organized as a part of engagements in local resource management focusing on architecture.

研究分野：都市計画、観光科学

キーワード：建築教育 建築公開 地域資源マネジメント ロンドン オープンハウス 欧州遺産の日

1. 研究開始当初の背景

(1)「市民参画型シティプロモーション」の重要性

市民自らが地域資源の魅力や価値を再認識し、その学習活動や成果発信活動を通じて、都市イメージの発信やまちへの愛着醸成へと繋げる取り組みの重要性が主張されている。例えば、「長崎さるく」のような市民ボランティアによるまち歩きガイドや、各地で行われているエコミュージアムやエコツーリズムのように、市民が地域資源を探索・発見、ストーリーを構築、地域内外へ発信、さらには資源の保全につなげるといったものである。

これらを「市民参画型シティプロモーション」と定義し、その一つの手法として、「オープンハウス」と総称される、期間限定で建築物を一斉公開する行事がある。この「オープンハウス」では、期間中複数の建物が一斉公開され、各建築をベースに関係者（所有者、設計者、市民活動団体など）による解説、教育活動、展示活動が行われ、自身の意思で自由に巡る来訪者を迎え入れる。これらの蓄積が、建築物を通じたまちへの愛着醸成や良好な都市環境のアピールへ繋がると期待されている。

(2)欧米都市の「オープンハウス」への学術的アプローチの必要性

欧州では、この「オープンハウス」が過去20年間で毎年の恒例行事として定着している。英国ロンドンのイニシアチブによる「オープンハウスワールドワイド (Open House Worldwide)」と欧州評議会のイニシアチブによる「欧州遺産の日 (European Heritage Day (EHD))」という枠組みのなかで、欧州の約50ヶ国で実施されている。

特に「オープンハウス・ロンドン」は、我が国でも「シビックプライド」を醸成する事例として既に紹介されている。欧米における「オープンハウス」の体系を整理すること、また企画・運営に関わる理念や技術を究明することの意義は大きい。

2. 研究の目的

本研究は、期間限定の建築一斉公開行事「オープンハウス」に着目する。「オープンハウス」では、個々の公開建物をベースとした市民活動の充実とそれらを束ねる全体のマネジメントが重要であるという仮説のもと、本研究では、国内および先進事例としての欧州の動向把握による体系整理や詳細事例調査による技術的側面の解明や活動実態把握を踏まえて、成熟期にある欧州都市から萌芽期にある我が国への技術移転の可能性を検討する。

なお、オープンハウスは一般的に、不動産物件販売のための住宅展示や建築家による作品の内覧会のことを指すが、英国ロンドンにおける「オープンハウス・ロンドン」の先進的取り組み、あるいは近年我が国における庭を対象とした「オープンガーデン」や工場を対象とした「オープンファクトリー」のように、

地域の特定の種別の資源を一斉公開する「オープン〇〇」という名を冠したイベントの隆盛を鑑みるに、妥当な呼称であると言える。

3. 研究の方法

本研究では、基本的に国内外各地の代表的、先進的な「オープンハウス」等の事例調査を積み重ね、それらを比較検討することで、「オープンハウス」の全体像にアプローチするという研究方法を採る。以下、研究期間中に事例調査を実施したプログラムである。

- 2012年6月 楽町楽家 (京都)
- 2012年9月 パリ (EHD)、ブリュッセル (EHD)、ロンドン (OH)
- 2013年5月 ローマ (OH)
- 2013年11月 オープン・アーキテクチャ (東京)
- 2013年11月 生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪 (大阪)
- 2014年9月 ロンドン (OH)
- 2014年10月 ニューヨーク (OH)
- 2014年10月 ダブリン (OH)
- 2014年11月 オープンナガヤ大阪 (大阪)
- 2014年12月 オープン台地 (大阪)
- 2015年3月 土佐高取雛祭り (高取)
- 2015年3月 村上人形さま (村上)

なお、欧州における2大スキームに関しては、統括組織である「オープンハウス・ロンドン」へのインタビュー調査や、各都市が集合するフォーラム「OHWWC」の聴講(2012年6月)、欧州評議会へのインタビュー調査(2012年9月)を実施した。また、国内事例に関しては、公開研究会「我が国における「オープンハウス」のひろがり」(2014年1月)を開催し、各地の主催者から情報収集した。

4. 研究成果

(1)欧州における「オープンハウス」の2大スキームの比較

特に欧州を中心とした海外の建築一斉公開プログラムが、「オープンハウスワールドワイド」および「欧州遺産の日 (European Heritage Day)」いずれかのスキームのもとで実施されていることを示したうえで、統括組織へのインタビュー調査等を踏まえ、両者の共通点や相違点を明らかにした(表1)。

特定の週末に、普段公開していない建築物を無料(割引)で、パブリックアクセスを可能にしている点、建築を通じた教育(歴史、文化、デザイン、環境等)を重視している点、また、各国、各都市、各地域の活動を尊重した柔軟な(緩やかな)フレームワークのもとで開催されていることが明らかとなった。

一方、相違点は下表のとおり、プログラムの基本単位(都市か国か)や主な公開対象(創造的な建築物か歴史文化遺産か)といった点において、差があることが確認できた。

表1 「オープンハウス」の2大スキームの比較

	Open House Worldwide	European Heritage Days
主催	オープンシティ(ロンドン)	欧州評議会/EU
基本単位	都市	国
主催組織	民間・非営利団体	中央政府や公的団体 (地域レベルでは多様な組織(公共・民間))
発展過程	1992年Open House London開始 2010年OHWW設立 OHWWCの開催(2011・12年)	1991年設立 2008年以降、欧州評議会による強いイニシアチブ 2009年からEUとの共管 毎年フォーラムの開催
公開対象	創造性や質の高いデザインを有する建築物	歴史文化遺産

(2)「オープンハウス・ロンドン」の開催動向
英国ロンドンで毎年9月の第3週末に実施されている「オープンハウス・ロンドン」の実施スキームや発展過程について、主宰者ヴィクトリア・ソートン氏へのインタビューや、文献調査等により、明らかにした。

運営組織は、オープンシティと言うNPO団体であり、通年で建築教育に係る様々なプログラムを実施している。この「オープンハウス・ロンドン」においては、時代、様式、用途、作家等多種多様な700~800棟の建築物が一斉公開されている点、6000人を超える市民ボランティアを確保している点や、とくに財政面において行政と密接な関係をもって運営されている点等が特徴的である(図1)。

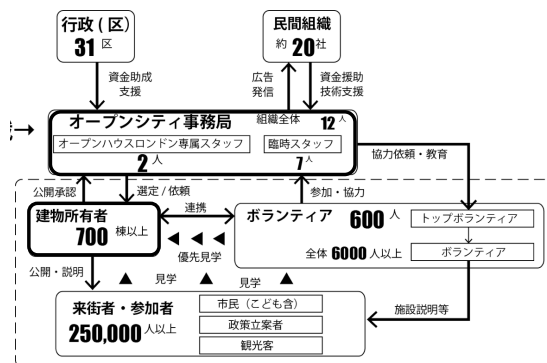


図1 オープンハウス・ロンドンの実施体制

また、個人住宅の公開数が多いのも「オープンハウス・ロンドン」の特徴であり、本研究では、2013年度に実施した公開住宅のオーナーへのアンケート調査に基づき、オーナーの動機や準備状況、参加による満足度や発展可能性を分析した。とくに、住宅公開に当たっては、オーナー自身が建築関係の職に就いている場合や、建築家との深い付き合いが背景にあることが明らかとなった。

これにより、主催者側の目的や意図だけでなく、住宅公開オーナーの動機や役割にまで踏み込んでプログラムの内容を明らかにすることができた。

(3)日本版「オープンハウス」の開催動向
国内の「オープンハウス」に関しては、事例が比較的新しいことや、実施背景や目的が多

様であることから、これまで横並びにして捉える見方は存在しなかったが、今回、各地の事例を収集した上で、現地調査や主催した研究会で得た情報により、国内の開催動向の把握や特徴分析を行った。なお、対象としたのは、楽町楽家(京都)、金澤町家巡遊(金沢)、オープン・アーキテクチャ(東京ほか)、関内外オープン(横浜)、オープンナガヤ大阪(大阪)、生きた建築ミュージアムフェスティバル(大阪)6事例である(表2)。

現地調査や国内代表的事例の主催者等を集め、2014年1月に開催した公開研究会を通じて、各プログラムの開催動向について、情報収集を行った。

表2 我が国における代表的「オープンハウス」の概要

	楽町楽家(京都)	金澤町家巡遊(金沢)	関内外オープン(横浜)	オープンナガヤ大阪(大阪①)	生きた建築ミュージアム(大阪②)
対象建築物	一般 町家	町家	スタジオ、アトリ	長屋	近代建築・戦後建築 生きた建築
名称	<オープンハウス>	<町家拝見>※2	<オープンスタジオ>	特になし	<生きた建築>
件数※1	初回時 18件(2005年) 直近 7件(2014年)	16件(2008年) 19件(2013年)	12拠点34組(2009年) 38拠点171組(2014年)	11件(2012年) 18件(2014年)	28件(2013年) 34件(2014年)
選定方法	事務局が既知の町家の中から適する物件を選定	事務局が管段入れない個人住宅や仕事場を中心に選定	事務局から集合アトリや個人事務所等に参加依頼	大学の調査による事例発掘	有識者会議が選定した「生きた建築ミュージアム・大阪セレクション」が中心
明文化された基準	-	-	-	-	大阪市生きた建築ミュージアム事業基本要綱
提供サービス	解説 ●(一部) 飲食 ●(一部) 展示 ●(一部) その他 ワークショップ	解説 ●(一部) 飲食 ●(一部) 展示 ●(一部) その他 ワークショップ	解説 ●(一部) 飲食 ●(一部) 展示 ●(一部) その他 ワークショップ	解説 ●(一部) 飲食 ●(一部) 展示 ●(一部) その他 ワークショップ	解説 ●(一部) 飲食 ●(一部) 展示 ●(一部) その他 コンサート、セミナー
料金	無料	有料	無料	無料	無料

日本版「オープンハウス」の特徴として、①住まい手・働き手の建築・都市に対する誇りや愛着を醸成すること、②住まい手・働き手同士のネットワークを形成すること、③多様な層の来街者・市民を惹き付けることが、意図的に仕掛けられていると説明することができる(図2)。

また、とくに海外の「オープンハウス」とは異なる点として、各地の主催者の建築物を対象とした地域資源マネジメントに関する多角的な活動の一環としてオープンハウス(建築物一斉公開プログラム)が実施されていることが明らかとなった。

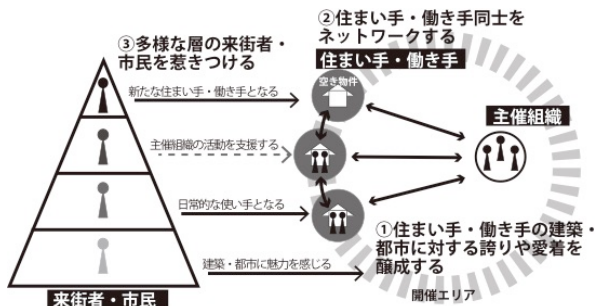


図2 我が国における「オープンハウス」における関係主体へのアプローチ

(4)欧州型「オープンハウス」の日本への導入可能性

前項で述べたとおり、事例は限られるもの

の、我が国でも建築物公開プログラムは、実施されている。しかし、テーマや保全対象が特定されている場合が多く、時代、様式、用途等の面で多様性を特徴とする欧州型のそれとは、性格が異なる。大阪市における「生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪」は、ロンドン型の「オープンハウス」を目指しているとも聞く。今後、当該行事が続いていくためには、民間で運営していくための財源の確保が重要になってくる。

(5)「オープンシティ」という枠組みの可能性
本研究課題が着目した「オープンハウス」の他にも、「オープンガーデン」、「オープスタジオ」、「オープンファクトリー」等、地域資源を期間限定で一斉公開するプログラムの存在が確認できる。今後、研究対象をこれら包括する概念としての「オープンシティ・プログラム」のもとで、資源一斉公開の意義や、資源性の違いによるプログラム間の相違などに注視していきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 岡村祐・野原卓・田中暁子 (2015) : 「建築物一斉公開プログラム「オープンハウス」の地域資源マネジメントにおける教育・啓発手段としての可能性」, 日本建築学会技術報告集, No. 49, pp. 1241-1246 (査読有)
- ② 岡村祐・野原卓・田中暁子 (2015) : 「建築物一斉公開プログラム「オープンハウス ロンドン」における住宅公開オーナーの参画動機と役割」, 日本建築学会技術報告集, No. 47. pp. 317-320 (査読有)
- ③ 岡村祐・野原卓・田中暁子 (2014) : 「我が国における建築物一斉公開プログラム「オープンハウス」の現状」, 日本建築学会大会学術講演梗概集, F-1, pp. 1011-1014
- ④ Y. Okamura, T. Nohara and A. Tanaka (2013) : Open House Events in Europe as a Strategy for Grass-Roots Promotion of Cities. Proceedings of the International Conference on “ Changing Cities ” : Spatial, morphological, formal & socio-economic dimensions, pp. 1472-1481 (査読有)
- ⑤ 岡村祐・野原卓・田中暁子 (2012) : 「欧州における建築一斉公開イベント<オープンハウス> その理念と各都市での取り組み」, 季刊まちづくり Vol. 37, pp. 110-118

[学会発表] (計3件)

- ① 岡村祐・野原卓・田中暁子 (2014) : 「我

が国における建築物一斉公開プログラム「オープンハウス」の現状」, 日本建築学会大会学術講演会 (オーガナイズドセッション), 神戸大学 (兵庫県神戸市), 2014年9月12日

- ② Y. Okamura, T. Nohara and A. Tanaka (2013) : Open House Events in Europe as a Strategy for Grass-Roots Promotion of Cities. The International Conference on “ Changing Cities ” : Spatial, morphological, formal & socio-economic dimensions, Skiathos, Greece, 19th June 2013.
- ③ 野原卓・岡村祐 (2012) : 「建築都市公開プログラム「オープンハウス」を用いたシティプロモーションに関する研究 その1 英国ロンドン Open-City の活動と世界的ネットワーク Open House Worldwide の取組みについて」, 日本建築学会大会学術講演会, 名古屋大学 (愛知県名古屋市), 2012年9月12日

[図書] (計2件)

- ① 菊地俊夫・松村公明編『文化ツーリズム学』, 朝倉書店, 2016年3月, 岡村祐「歴史文化資源をめぐる歴史的環境保全と観光開発の関係」, pp. 159-169
- ② 日本建築学会編著 (2014) : 『まち建築—まちを生かす 36 のモノづくりコトづくり』, 彰国社, 2014年4月 野原卓・岡村祐・田中暁子「建築の見方、楽しみ方を育てる オープンハウス・ロンドン」, pp. 150-153

[公開研究会] (計1件)

- ① 「我が国における「オープンハウス」のひろがり」, オープンシティ研究会主催, 首都大学東京秋葉原キャンパス, 2014年1月13日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡村 祐 (OKAMURA Yu)

首都大学東京都市環境科学研究科観光科学域 助教

研究者番号 : 60535433

(2) 研究分担者

野原 卓 (NOHARA Taku)

横浜国立大学都市イノベーション研究院 准教授

研究者番号 : 10361528

田中 暁子 (TANAKA Akiko)

公益財団法人後藤・安田記念東京都市 研究所 研究員

研究者番号 : 70559814